東方妄想記

XX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方妄想記

【Ｎコード】
Ｎ５７５２Ｙ

【作者名】
ｘｘ

【あらすじ】
東方妄想記です
一応『チートを通り越した先には何があるのか』の続編ですが
それを読まずとも楽しめます

・・・読まないほうが楽しめるかもしれません

主人公は原作知識持ちです
メタキャラです

そして「これがやりたかっただけだろ」をこれでもかと詰め込んでいます

原作を尊重しますが独自解釈や二次創作ネタ満載です

以上が許容できる方
楽しめる方のみお読みください

ハーレム？　原作尊重と言ったでしょう？
ニコポ？ナデポ？
ぬるぽの親戚ですか？　ガッ！　しますよ？

＝ー～あらすじ～ー＝

生前の奇行が神や創造主以上の奴のお眼鏡に叶い
テンプレよろしくチート転生・・・を断ってノンチート転生
だが魔法（魔力ではない）・技術・テクニック・知識を
高速レベル上げでカンストレベルにした
（ＤＱ９で言うとまさゆきの地図）
しかし転生先の世界が何者かによって破壊され
その犯人は東方Ｐｒｏｊｅｃｔの幻想郷にいるかもしれならしい

そんな感じの主人公、霧先（きりさき）　涼（りょう）が行く
作者の妄想の中
霧先はどう行動するのか・・・・・・

1話：幻想の地へ踏み入る（前書き）

この東方妄想記は
ｘｘの妄想がこれでもかと詰まっております

序盤は説明がくどい位にありますが
それでも良い方のみお読み下さい

1話：幻想の地へ踏み入る

［現代世界］

「う～んこの辺か？」

俺の名前は霧先涼（きりさきりょう）
ここは幻想郷の無縁塚に近い場所だ
博麗大結界（だと思われる結界）をグルッと回って来たのだ
多分当たっているだろう
間違ったときは間違ったときだ

幻想郷とは
昔、妖怪が繁栄したいた時代に
その時代では妖怪が多くて迷ったら最後
妖怪に食われるから誰も近寄らない
人里離れた辺境の地が幻想郷と呼ばれるだけであった
しかしその妖怪を退治しようとそこへ行く人も居た

そして月日は流れ人間の文明は発展しその力は増していく

幻想郷の人間と妖怪のバランスが崩れる事を憂いた
妖怪の賢者八雲（やくもゆかり）紫・境界の大妖怪が
５００年前に『幻と実体の境界』を張り妖怪を招き
バランスを保った

さらに月日は流れ、非科学的な現象は『迷信』と切り捨てられ
世の中から排除されていった

幻想郷は
妖怪と妖怪と共に暮らすことを選んだ人間の末裔が
強力な結界の中で暮らす

しかし今では人間と妖怪はかなり仲がよくなっており
妖怪が人間の里へ遊びに行ったり
人間が妖怪の家へお呼ばれされたりもする

・・・まぁ人間が妖怪を退治し
妖怪が人間を襲う関係は変わっていないのだが
そしてこの関係は妖怪が妖怪としてあるために
形式化・擬似的化してでも残す必要がある

そんな場所・・・というより一つの世界である

現代に尚この世界は存在し、勿論幻想とされた
『陰陽術』『妖怪』『風水』
『魔法』『神』『超能力』『幽霊』
などがいくらでも存在する

博麗大結界と呼ばれる強力な結界は
それを現代社会と隔離するための結界で
無縁塚とはその結界が緩むことがある場所・・・

と今は覚えておけばいいだろう

今はそこへ行くために緩んだ結界に穴を開ける作業を行なっている
現代では穴を開ける時に、液体である水を使った
『ウォーターカッター』と呼ばれるそれがある

それと同じことを
俺は現代では幻想とされている『魔力』で行なっていた

何故こんなことが出来るかというと
少し複雑な事情があるが

死んで異世界トリップ↓テンプレよろしく力を貰い転生↓
↓だが断って「努力が欲しい」↓もう十分と転生↓
↓転生先の世界が破壊される↓犯人が幻想郷にるかもしれない↓
↓そういや元の世界って幻想郷があったよね？↓
↓元の世界に戻る↑いまここ

という感じだ
ついでにいうと博麗大結界を発見するのも
科学に慣れきった一般人には無理だ

「ここをこうやって・・・と開いた開いた」

緩んだ結界にウォーターカッターならぬ
魔力カッターで穴を開けた先には
亡霊のいない墓地が

「いざ行かん、幻想の地へ・・・ってね」

俺は幻想郷に足を踏み入れた

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

［幻想郷］

「到着っと≪ブォン・・・≫！？　いきなりか！」
スキマが開いたのだ

『スキマ』とは
［東方Ｐｒｏｊｅｃｔ］の八雲紫というキャラクターが使う移動手段である
八雲紫の［境界を操る程度の能力］を用いて創った空間である
『スキマ』と呼ばれる空間は不気味目が多数ある空間だ
要はワープなのだが

「何者なのかしら？
結界に穴を開けてここに侵入するなんて
そもそもここを知っているのは何故？」

金髪に日傘、紫色を基調としたフリルの付いたドレス調の服
そして第一印象『胡散臭い』
大人の女性の美しさと子供の可愛さを併せ持つ
というよりはその境界線上にあるような容姿・・・・・・
案の定、スキマから現れたのは八雲紫であった

八雲紫とは
『境界の大妖怪』『幻想郷の創造主』『妖怪の賢者』
などの二つ名を持つ強力な妖怪であり
［境界を操る程度の能力］を持つ
これはありとあらゆる境界を操ることが出来る
例えば『生と死の境界』『可と不可の境界』
『始と終の境界』『人と妖の境界』など

万物の境界を操ることが出来る為
最も恐れられている能力の一つである
無論、この能力を持つ彼女は妖怪の中では最も強い部類に入る

「『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』って知っているか？」

東方Ｐｒｏｊｅｃｔとは
幻想郷を舞台とした同人ゲームや漫画の総称である
原作の弾幕シューティングゲームや漫画や小説
二次創作の防衛系ゲームなど
それらを纏めてそう呼ばれる

要は幻想郷が外の世界でゲームになっているのを知ってるか聞いた

「知らないわね、貴方が此処を知っている事と何か関係が？」

ここの紫は知らないらしい

「ある、だけどこれ以上は教えてやんない」

説明メンドい

「これでも？」
ここで紫が威圧する為か妖力を吹き出す
その勢いは吹き荒れる風の如く

・・・これでただの垂れ流しなのだろうから恐ろしい
それに、これは紫本来の妖力でもないだろう
彼女は『境界の大妖怪』なのだから

妖力、それは妖怪の持つ力のこと
その力にあてられた人間は威圧され、恐怖する
多量にあてられれば恐怖により失神する事もある
勿論抵抗できる者も存在する、そして俺は抵抗できる者の一人

（・・・一般人ならまず間違いなく気絶しているな）

「これでも」
俺は魔力を圧縮し、爆発音と共に魔力を吹き出す

今出せるのはこのくらいだが
紫は驚いていた

何故なら、先程紫が出した妖力を
俺の魔力が吹き飛ばしていたからだ
出した量は目算で向こうの１／５程だが
ただ垂れ流しているそれを吹き飛ばすには十分過ぎる

「へぇ……合格よ
無闇に入って死なれたら目覚めが悪いから少し試してみたの
気絶していれば追い返していたんだけど・・・予想以上ね」

「つまりまだ目が覚めていない、と」

「そうなのよ、未だに眠くてね・・・・・ってそうじゃなくて！
・・・≪ごほん！≫で、ここに何用？」

「俺が探している人がここに来る可能性があるな、と

そう思ってここに来た」
そこで紫は少し考えた後
「まぁいいわ
『幻想郷は全てを受け入れる』」
「『それはそれは残酷な話だな』」
定句(テンプレート)で返す
このやり取りは目が多数ある不気味な空間だ
今のは『東方萃夢想』八雲紫のセリフ
『幻想郷は全てを受け入れるのよ、それはそれは残酷な話ですわ』
を元にしたやりとりだ
「・・・　本当に何処で知ったのかしら?」
紫は呆れた様子で返した
警戒はしているが別に強くはない
俺は強く警戒するには値しないということか
まぁもちろん
「秘密」
なのだが
「じゃぁ私は帰るね」
「また会う、そんな気がする」

フラグ臭がビンビンする

「最近侵入者も来たことだし、それも否定できそうにないわ」≪ブォン・・・≫

そう言うが速いか紫はスキマに入っていった

侵入者？　神子達は違うだろうし、奴が既にここにいるとは考え辛いだとすると一体？

まぁいいか、何処へ行こうか決めていなかったからそっちが先だ

＝＝

［スキマ］

スキマに入っていった八雲紫は

一人の侵入者について思案していた

（今さっき入ってきた剣といい今侵入してきた人間といい

ほんと、最近は侵入者が多いわねぇ・・・

何か関係でもあるのかしら？）

本当に関係があるのかどうか・・・・・

それはこの世界の創造主にもわからない

（今の侵入者の実力もよくわからないし

彼が探しているのは『人』、つまり剣ではない

とすると「これからくるかも」なのねぇ？）

その後も妖怪の賢者は思案するが

一向に答えは出なかった

原因は単純に思考材料の不足である
どんなパズルの達人でも
ピースの足りないパズルは完成することはできないのだから

結局、出た答えは
「博麗大結界に穴を開けて侵入してくる奴が居るから
様子を身に来たんだけど・・・大当り、暇を潰せそうね
幻想郷に危害を与えるようなら
きちんと制裁を加えないといけないけど、まぁ大丈夫でしょ」
これであった

「あ、結界の修復急がないと・・・ってもう修復されてるし
本当に何者なのかしらね？　あいつは」

何もこの答えは間違っていない
永い時を生きる者にとって最大の敵は『暇』なのだから

2：紅魔館へ進む　闇の妖怪ルーミア（前書き）

キャラの説明は入ります

2：紅魔館へ進む　闇の妖怪ルーミア

［夜空（主人公は飛んでおります）］

霧先は紅魔館へ向かって夜空を飛んでいた
思案の末に紅魔館へ向かうことにしたのだ

紅魔館とは
主の吸血鬼とその吸血鬼に仕える従者
吸血鬼と親友の関係にある魔女にその使い魔の小悪魔
そして多数の妖精が住む紅い、そう真っ赤な館である
そして館の門を守る妖怪も居るのだがよく居眠りしている

そういう場所だ

夜である事は何もおかしくはない
人目につかない時間を選んで結界を破ったのだから夜になるのは当然
だが『空を飛んでいる』のはおかしいだろう
と思う方も居るはず

空を飛ぶ事、それはこの幻想郷では別に珍しいことではない
幻想郷の中ではある程度の実力者になると普通に空を飛んでいる
霧先はその「ある程度」以上の実力を持っているだけなのだ

そんな事を解説している間に
黒い球体・・・否、闇と形容したほうが良い黒い塊が飛んで来た

「ん、あれは・・・・・」

その「ある程度」の実力者の一人である

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「貴方は食べられる人類？」

あちゃぁ、ルーミアか・・・

ルーミアとは

『宵闇の妖怪』『暗闇に潜む妖怪』などの二つ名を持つ妖怪で

［闇を操る程度］の能力を持つ

外見は

金髪にリボン風の御札を付けて

白いブラウスの上に黒いジャンパースカートを着ている女の子

といった感じだ

能力は一見、強そうに見えるが

視覚的な闇しか操ることは出来ず、その闇の中は

ルーミア自身も何も見えない空間になっている

体を隠しながら近づくにしても

黒い塊に見え、逆に目立つ本末転倒という有様

ここまで書けば分かった方も居るだろう

先程の黒い塊はこのルーミアだったのだ

（こういう事を予想して
外の世界でバイトして力□リーＸＴトを大量に買っておいてよかった
こっちじゃ手に入りにくそうな塩も結構買っておいてあるし
食生活にあまり問題はないだろう）

『外の世界』とは
今この物語を見ている貴方が住んでいる世界のことである
ちなみに幻想郷には海はない
なので塩は八雲紫が運んでくる分しか期待できない

話を戻そう
二次創作ではよく「人食い妖怪」として知られているルーミアだが
彼女は人を襲うことを面倒臭がっており
余程腹が減っていない限り人を襲うことはないであろう

この物語も二次創作なのであるのだが

今はその「余程腹が空いている状態」なのだ
だったら対処は簡単、腹を満たしてやるといい

「力□リーＸＴト食うか？」

「なにそれ？」

「外の世界では人間が非常食として食べているお菓子だ
これが結構美味しいんだよ」

「食べる～」

「《ペリペリ》こうして《ピリピリ》こうやって・・・っとほら」

「えへへーありがとー」《もしゃもしゃ》

「ほら麦茶もあるぞ、粉ものだし喉も乾くからな」

「何から何まで本当にありがと
ここまでしてくれる外来人なんて初めてだよ」

「あはは、俺は外の世界でも変わり者だったからなぁ」

見た目相応の可愛い反応をしやがる
和むなぁ・・・・・演技であることを除けば、ね……

ルーミアには、二次創作の一つに「ＥＸルーミア」
というものがある

これは頭のリボンが御札であり
取りたくても自分では触れないことから
『実の所あれは力を封印している御札なのでは？』
という疑惑から持ち上がった二次設定である

さらに言うと
『大妖怪と呼ばれる力を持つ妖怪はあまり自分の拠点から動かない』
ということと
『ルーミアは人を襲うことを面倒臭がっている』
という公式の設定からも推測できる

何が言いたいかというと
『ＥＸルーミアは大妖怪クラスの実力を持っており
今までの仕草や言動は札を取ってもらう為の罠である』
ということだ

言動もわざとらしいし御札からは封印する系統の力を感じる
間違いない

（あっちも表面上演じているだけだし
俺も表面上演じておけばいいか）

「ねぇ」

「なんだ？」

「このリボン取って欲しいの」

早速か、こっちを騙せたと思っているらしい
実際に可愛いし和んでいたからなぁ

「どうしてだ？　結構可愛いと思うぞ？」

「うーん、もういい加減飽きて来ちゃったんだよねぇ
だから・・・取ってくれない？」

・・・惑わす妖気が少し出ているな

先程の演技で騙された奴なら特に考えずに御札を取っているだろう

「やめておくよ、その御札は何かを封印しているみたいだし」

『築いているぞ』と牽制球、仮にも俺に妖力当てたんだし

妖怪からは舐められる訳には行かない

「！・・・・・何の事？

でも取ってくれないならこのままでもいいかもね」

気付いたらしい

というかボロ出てるボロが

「食いもんならいつでもやるからなー

生憎今は力□リーXTトしかないけどさ」

そう言って俺は紅魔館へ飛んでいった

次に会うのは多分・・・チルノだろう

3：紅魔館へ行く　氷の妖精チルノ（前書き）

初登場の原作キャラには説明が入ります
ご了承ください

名前が出ただけでも多少解説が入ります
ご了承ください

追記：弾幕ごっこでダメージを受けるように修正

3：紅魔館へ行く　氷の妖精チルノ

［霧の湖］

紅魔館は『霧の湖』と呼ばれる湖の孤島に建っているのだが
その『霧の湖』が曲者で、方向感覚が優れていてもよく迷う
何故かって？　それはな・・・

「道に迷うは、妖精の所為なの」

そう言って現れたのは

薄めの水色のふわふわのウェーヴがかかった
セミショートヘアーに青い瞳
白のシャツの上に縁に白いギザギザ模様の付いた青いワンピース
背中に氷の結晶のような羽根が六つ持った
十に満たない悪戯好きの子どもみたいな雰囲気と見た目

氷の妖精チルノだった

チルノとは、［冷気を操る程度］の能力を持ち
『湖上の妖精』『氷の妖怪』などの二つ名を持つ妖精である

［冷気を操る程度］の能力を使って
物や生物などを凍らせることができる
しかし冷気はいつもダダ漏れ
夏場でもチルノの周りは寒い

そして十才にも満たない子供のような外見をしており
その外見通りの知能である、二次創作で言われるような
『1＋1＝2が理解できない』なんてことはない・・・多分
世間知らずであり「足し算」の概念を知らない可能性ならある

「じゃぁ道案内もできるよね」

「あたいがするとでも？」

素直じゃない
チルノは、なまじ力があるがばかりに
他の妖精から怖がられて近づかれないのだ

妖精は暖かい場所が好き
チルノの周りは寒いのも関係しているだろう

妖精は人間より力が弱い
見た目相応の子ども位に
そしてそれは精神的なものも例外ではない

想像してみて欲しい
他の子からはぶられてしまった子どもを・・・・・

結構想像がいりまじっているのだが
『妖精が陽気が好き』『チルノの周りは寒い』
は公式設定である

偶然通りかかった俺を
遊び相手と認識したいのも無理はない

勿論チルノにも友達はいる
チルノを気遣い、一緒に笑い、泣いてくれる友達がきちんといる

だけど同じ実力を持っているわけではなく
本気を出せば簡単に勝ててしまう

チルノは『遊び相手』が欲しいのだ
対等に遊べる『遊び相手』が・・・・・ね

（魔力だけでやればチルノと同じくらいの量かな？
それで行こう、なんだかんだ言って子どもと遊ぶの好きだし
本気になって叩きのめすのもね）

「じゃ、無理矢理にでも通ろうかな」
俺はそう言いながら即席で作ったスペカを取り出す

スペカとは
スペルカードの略であり
幻想郷での唯一のルールである決闘
スペルカードバトルを行うための宣言札である

スペルカードバトルとは
幻想郷で流行っている決闘（あそび）のルールである
『スペルカードルール』で戦うことである

スペルカードルールとは（今回は弾幕ごっこについて）
現実で一番近いのはシューティングゲームであろう
自分の技を札に刻み、それを『宣言』することにより
発動させ、弾幕を張る
最終的に相手の札全てを避けられたなら避けた人の勝ち
例え余力が残っていようと

その札は宣言の為のものであり札自体に力は無い
また、叩きのめすためのものではないので避ける余地を残す
それに術やらなんやらを刻み込んで初めてスペカとなる
外来人用の物は力を持っているらしいが・・・

俺は自力で発動できるからなぁ

「いいよ、あんたが勝ったら道案内してあげる」

俺が負けたらどうする気なんだろ？
まぁいいか、関係ないし

「先ずは俺からだな
――初符『ファーストテスト』――」

そして弾幕が展開される
始めは小手調べでありそこまで難しい弾幕ではない
見た目に圧倒されなければ、ね

「うぉあ！　多い、多過ぎるよこれ！？」

量が多く、その数は５００を超える
その上に様々な方向から来る
・・・・・まぁ全部自機狙いの単発弾だし
それに後ろから来ることは無いんだけどね

しばらくしてチルノはそれに気付いたらしく
チョン避けしながらこちらに弾を飛ばしてくる
沢山の弾を全て避け、いよいよスペカの効果時間が終わる

＝＝Ｂｒｅａｋ　Ｓｐｅｌｌ！！＝＝

「なによ、こんなの簡単じゃないか
びっくりしたー・・・今度はこっちの番だよ！
ーー氷符『アイシクルフォール』ーー」

さて、アイシクルフォールと言えば正面安置だが
・・・Ｎｏｒｍａｌだね、これは

アイシクル（ｉｃｉｃｌｅ）フォール（Ｆａｌｌ）
という名の通り
氷のつららを辺りに展開し、下に落とす

自分の真上と真下に展開しない為に
チルノの真下が安地となるのだが
それをＮｏｒｍａｌで追加される自機狙いの中弾が防ぐ

安地なんて初めから使う気のない俺には効果がないのだが

氷柱が落ちてくると言っても隙間だらけだ
そこを抜ければいい

だけど避け続けるのは面倒臭い、だから

「ていっ！」
ダダダダダッ！と魔法弾を展開する

それがチルノに当たり
チルノがダメージを受け、スペカの耐久値が削れる

そして耐久値を削り切り、チルノのスペルを突破する

＝＝Ｂｒｅａｋ　Ｓｐｅｌｌ！！＝＝

「やるね！」
少し傷を負ったチルノが笑う

「まだまだ、今度は俺の番だよ？
ーー乱符『クラスターショット』ーー」
俺が大きい魔弾を一つ放つ

それが砕けチルノに襲いかかる

が、チルノはスペカ名である程度予測していたらしく
大きく避けたチルノには当たらない
俺は最初の魔弾を放ち、それをチルノが避ける
それが繰り返される
が、何回も繰り返す内にどんどん発射間隔がどんどん短くなる
それをチルノが必死に避ける内にスペル時間が終了する

＝＝Ｂｒｅａｋ　Ｓｐｅｌｌ！！＝＝

「あ、危なかったー！」

「次は弾幕同士を当ててみるか？」

「それいいね！　この繰り返しも飽きてきたし、やろう！」

チルノは氷の妖精の割に熱い性格をしている
だからこういう話には乗ると思っていた
案の定乗ってくれた、ぶつけるって楽しいからね
・・・なんだか自分もこの遊びを楽しんでいるみたいだ
だったら楽しんでおこう
「ぶつけるんだから火力重視でいくぜ！
～～～魔流符『マジックフロウ』！～～～」

「こっちだって！
～～～氷塊『グレードクラッシャー』！！！～～～」
俺の右手から速い川の流れのような魔力の流れが放たれ
チルノは大岩の様な氷の塊を作りぶん投げる
それがぶつかり氷塊が押す、が
魔力の流れに対して推進力のない氷塊
最終的にどちらが勝つかなんて決まっていた
魔力の流れが氷塊ごとチルノを押し流し、チルノが落下
霧の湖に水柱が上がる

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

しばらくするとチルノが上がってきた
「おーい大丈夫か～？」
「あたいは元気だよ！」
俺が声をかけると元気のいい返事が帰ってきた
「勝負は俺が勝った事だし道案内頼めるか？」
「今度は勝つからね！」
「楽しみにしているぞ」

こういうわけで紅魔館に案内してもらうこととなった

また遊んでもいかもしれない

3：紅魔館へ行く　氷の妖精チルノ（後書き）

今回は霧先もチルノも本気ではなく遊びです
ちょくちょくチルノとは遊ぶかもしれません

４：紅魔館に着く　大妖精　門番妖怪美鈴（前書き）

紅魔館を高みかんって打ってしまった・・・・・・

もちろん途中で修正しました

4：紅魔館に着く　大妖精　門番妖怪美鈴

［紅魔館建つ島の上：紅魔館が見えるくらいの場所］

俺はチルノの案内で紅魔館に到着することができた
大妖精は、俺とチルノが戦っていた場所の
すぐ近くに居たため一緒に着ていた

「大ちゃんあそこで何やってたの？」

「私はあそこでチルノちゃんとその人の戦いを見てたの
すごかったねーあれ、特に最後のあの押し合い！
でもチルノちゃんは本気出してないよね？
あの氷の塊、本当なら操れたんじゃない？」

チルノに大ちゃんと呼ばれたのは
チルノとお揃いの服だけど縁の近くに白い線が入った服
良くある絵に描いたような虫みたいに二枚の薄い羽
緑に近い碧色の髪の毛に青に近い碧色の目
チルノと同い年だけど
位の大人しい雰囲気の子どもみたいな見た目

通称大妖精、愛称は大ちゃんである

大妖精というのは妖精の中で強い力を持つものの総称であり
本名ではない・・・が
東方で『大妖精』と言うならこの子を指すだろう

「氷って冷気の塊だしなぁ
お前の能力使えば一発じゃないか？」

氷は冷たい、つまり冷気の塊
［冷気を操る程度］の能力を持つチルノなら操れるだろう

ここで今更だが［〜程度の能力］について説明しておこう
東方の公式キャラのほとんどは何かしらの能力を持っている
公式のキャラ説明で［〜程度の能力］と表記されている
キャラが能力を披露した事は殆どないので
この二次創作ですら推測でしかない

『程度』と書いてあるのに全然『程度』じゃねーよ
と言う方もいるだろう、全くもってその通りである

「おお、考えたこともなかった」

おい、この？やっぱバカだ

「そう言えば貴方は？」

そういや自己紹介してなかったっけ

「俺の名前は霧先（きりさきりょう）　涼
ちょっとおかしな人間だよ
それと、今度はそれ込みでやってみるか？
今度は俺が勝ったらお前は俺の弟子な」

こいつを鍛えるのも楽しいかもしれない
そう思って提案する

「あたいが勝ったらあんたはあたいの手下ね」

弟子と師匠は上下関係という少し偏った知識から
チルノが勝ったら俺が下になるという提案をしたのだろう

「よし条件は成立、決戦は次の異変の宴会の後」
時間も時期も解らないね

「乗った、早速特訓だ！　行くよ大ちゃん！」
そう言うが速いかチルノは飛び去る

「うん！」
と言って大妖精も飛び去ろうとするが

「あ。」
低空で止まった

「なんだ？　大妖精」

「大ちゃんって呼んでくれると嬉しいです
本題ですが、何でチルノちゃんの能力を知っていたんですか？」

確かに、初対面で能力を知っていることは疑問に思うだろう

「氷の妖精みたいだし、戦闘スタイルでイメージしてみた
当たったみたいだけどね」

ここの大ちゃんはチルノの保護者ポジか

「そうですか
そういうことにしておきます
・・・・また、チルノちゃんと遊んであげて下さいね」

「フッ、今度チルノが負けたらお前も一緒に鍛えてやるからな
チルノと対等に遊べるくらいには」

「有難うございます」

大妖精は現在のチルノの唯一の友人である
チルノと対等に『遊ぶ』事が出来ない事に
もどかしさを感じていたのだろう

今度こそ大妖精は飛び去っていった

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「しっかし赤いなー窓もない
吸血鬼が主だし当然か、だったら照明はどうするんだろ
主人は夜目が効くから大丈夫だろうけど
メイド長の人間はそうはいかん、蝋燭か？　それとも」

次の憶測を言う直前で言葉を遮られる

「外来人の方ですね？

私が守っている館についての評価は別に良いのですが
今紅魔館は・・・」

紅魔館の門番をしている妖怪、紅（ホンメイリン）美鈴が告げる前に
爆発音が鳴り響き、煙が上がる

「このように緊急事態ですのでお引き取り願いますか？」

いつもは居眠りしている美鈴も今回ばかりは起きている

紅（ホンメイリン）美鈴とは
紅魔館の門を守る妖怪である

三つ編みした赤髪に青い瞳
足を覆う部分を縦に切れ込みを入れた緑色のチャイナドレスを着ている
人間の女性となんら変わらない容姿をしている、が妖怪であり
［気を使う程度］の能力を持っている
この能力の指す『気』は武道のオーラとかのそれだ
武術の達人であり、強みは人間と比べて弱点が無い所

時たま闘いを挑む武闘家もいるらしい

「妹様……か？」

妹様、それは紅魔館主の吸血鬼の妹
フランドール・スカーレットの事だ
情緒不安定で［ありとあらゆるものを破壊する程度］の能力を持つ
全ての物質には『目』という最も緊張している部分があり
その『目』を手の中に移動させて握り締めることで破壊する能力

能力を使う時のセリフ「ぎゅっとしてドカーン」は余りにも有名である

「！？　何故それを！」

「さぁ、ね」

「この機に乗じて館を落とす気ですか・・・させません！」
美鈴はそう言った瞬間にはこちらに駆け出す

早とちりか！　東方でよくあるはやとちりなのか！？
狙ったこどだしいいか

「シッ！、ホッ、ハアァア！」
右手突き、それを俺は右手で掴む
掴んだ右手に左足蹴り、俺は手を離して避ける
そのまま飛び上がって右かかと落とし、後ろに跳んで避ける
美鈴のかかと落としが地面を割る

それを互いに流れるように行っていた

「なかなか出来るようですね・・・」

「付け焼刃だけどね」

「付け焼刃のレベルじゃないですよ、ここからは能力も使います」

「俺の能力はちゃっちいけどな」
ここに来てから発現したが
少なくとも戦闘向きではない

「いつもなら武闘家として相手をしてもいいですけど
今回は緊急事態ですからね・・・ハアァア！」
1秒も経たぬ内に気を貯め、俺を素早く倒しにかかる
殺しにかからないのは美鈴の性格故か
攻気、攻意はあっても殺意はない

「ハァッ！」
「手加減入ってたら俺を倒せないよ」

飛び蹴りをフラッと避け、足元にある仕掛けをする

「ていっ！」

そして後ろ回し蹴り
それを掴み、一言

「空で戦うのは苦手だろう？」
瞬間、俺の足元で爆発が起こった

5：門番と空中戦　スペカ合戦（前書き）

解説では
弾幕を撃つ側＝敵機
弾幕を撃たれる側＝自機
となっております

自機依存の弾幕＝打たれる側の移動に依存する弾幕
だと思ってください

5：門番と空中戦　スペカ合戦

［紅魔館：門前］

「空中戦は苦手だろ？」
瞬間、俺の足元で爆発音が鳴り響き
上空方面へ吹き飛ばす
無論、俺が足を掴んでいた美鈴も一緒に上空へ
「ハッ！」
美鈴が気を解放して俺から離れる
が、もう遅い
既に飛んでいる状態だ

「用意周到、何処で情報を集めたんですか？
まぁ答えてはくれないと思いますが」

「当たり前だ、ここからは幻想郷らしく弾幕ごっこといこうじゃないか
――――始符『ファーストトライアル～Ｌｎａｔｉｃ～』――――」
チルノに放った初符（しょふ）『ファーストテスト』は
いわばＮｏｍａｌ難易度の札（スペカ）だ

今使ったのはＬｎａｔｉｃ（狂ったような）難易度の札（スペカ）
要は最高難易度

原作：上海アリス幻樂団　ＺＵＮ氏作の東方Ｐｒｏｊｅｃｔシューティングゲーム
その作中の難易度は４つになっている
Ｅａｓｙ（かんたん）・Ｎｏｍａｌ（ふつう）・Ｈａｒｄ（難しい）
そしてＬｕｎａｔｉｃ（狂ったような）の４つ
Ｅｘｔｒａ（エキストラ）やＯｖｅｒｄｒｉｖｅ（暴走）・ラスト（終わりの様な）ワードなどもあるが割合する
尚、このルビは必ずしも正しいわけではないことも明記しておく

４つの難易度の差は
Ｅａｓｙ＜Ｎｏｍａｌ＜Ｈａｒｄ≪Ｌｎａｔｉｃ
だと思っておくと良いだろう

その証拠に今のスペルを展開した後
１００発以上の単発自機狙い
８０発を超える４ｗａｙの偶数弾（四方を取り囲むように）
そして俺が放つ多数の自機依存散蒔き弾（ランダム弾）

これを攻略するなら
自機狙いをチョン避けしながらランダム弾を避ける必要がある
２Ｄ（ゲーム上）なら切り返しも要求されるだろう
単純だが気合避けを要求される弾幕だ、事故もあるだろう

これを美鈴は

「っ！？
ーーーー極彩『彩光乱舞』ーーーー」
同じくＬｕｎａｔｉｃの弾幕で相殺を試みる

良い選択であろう
俺の弾幕は自機狙いだらけである為
避けられないと判断したなら
盾の様に展開する弾幕で相殺するのが良い選択と言えるだろう

だが、この「テスト・トライアル」シリーズの弾幕にはボム厳禁
ペナルティとして発狂を始めるからだ
テストシリーズならボム終了直後に発狂が終了するが
トライアルシリーズの弾幕はスペカ終了まで続く鬼畜仕様
ボムバリアを張らない分有情である

だｋど避ける側が一度ピチュれば発狂は収まり
ピチュった瞬間に耐久値が一気に削れる
さらに攻撃でも時間でも耐久値が減少する
時間での減少は発狂と共に加速する
リソースはボム２個か３個もしくは残機一つで十分だろう

このシリーズのコンセプトは
対戦相手の技量を計ったり高めたりすることだ
それを無視してもらっては困る

得点稼ぎやるスコアラーなら間違いなくボムを選ぶだろうけど

ボムを放った瞬間から形はそのままにその総量が３倍に跳ね上がる
ランダム弾に至っては４倍だ、発射角度が広がったから密度は２倍

回転避けは恐らく無理、そして速度は倍になる・・・発狂だ

《ピチューン！》「ぐっ・・・」
相殺を試みた弾幕もスペカの耐久値も一気に削れ＝＝Ｂｒｅａｋ
Ｓｐｅｌｌ！！＝＝
時間稼ぎにはなっており、こちらの耐久値も切れ＝＝Ｂｒｅａｋ
Ｓｐｅｌｌ！！＝＝
しかし美鈴は被弾している

「こんなことなら避けに行ったほうが良かったな・・・」
美鈴が少し後悔したように呟く

「もう遅いよ・・・でどうするよ、まだやるか？」

「ボム無制限、残機は今のを含めて３つ」

今のを含めなくともルール的にはなんの問題もない
が、含めると言うのか・・・律儀なやつだ

「いいだろう、次は俺の番か
ーーーー乱弾『空襲（くうしゅう）の塊弾（かいだん）』ーーーー」
俺は高く飛び上がり、そして一つの弾幕を作る

先程チルノに放った『クラスターショット』と同じタイプ
だがチルノに放った物より二回り程大きい
それを

ドンッドンッドンッドンッ！という小気味の良い音と共に
空襲の如く移動しながら放つ

それが地面に近づくと砕け地面に炸裂する
低空にいては不味いと思ったのか上空に上がる
そこを自機狙いの高速小弾で撃つ

「よっと」
そう易々とは当たってくれない

「それにしても、スペカ戦なんてよく受けてくれたな」

「遠距離からの射撃で嬲り殺されるなんて洒落になりませんからね
それに比べたらいくらかましです
時間稼ぎだけでもいいですけど精神力が持ちません」

「俺としてはさっさと倒してあれを止めに行きたいんだけどな」
俺がそう言った時にまた爆発、そして煙

今ので爆発は5回目か？

「止めるのを手伝ってくれるのですか？」

「？　はじめからそのつもりだったけど？」

「じゃぁなんで挑発したりスペカ戦に持ち込んだりしたんですか・・・」

「成り行き、かな？」

「はぁ・・・」
呆れられました

まぁこういう奴だし？俺

「でもそれはお嬢様のプライドがお許しにならないと思いますので
一時休戦して、その後お嬢様達が劣勢だったら入ってもらいます」

「りょーかい、そっちの方がプライドやられそうだけどね」

「背に腹は代えられないといいますし
いざとなれば何振り構ってられません」

そういや、美鈴は何時もならフラン（フランドールの愛称）
が暴れている時にはレミリアに加勢している筈なんだが
何故かここにいる

レミリアが運命でも覗いたのかね？

レミリアとは、紅魔館の主であり
レミリア・スカーレットの事である

レミリアは［運命を操る程度］の能力を持っており
その副産物として運命を見ることが出来る

一ど聞いただけでは、最強のようにも見えるが
そこまで強いというわけでもなく
弄った運命が即座に戻ったりもするので
運命を覗ける事の方が主だと思われる

一般人程度なら運命を弄っても元には戻らないと思われる

「ところであんた、なんでここに？
有事みたいだからいなくてもおかしくないと思うが」

「お嬢様が何かを見たようです
笑っていました、嬉しそうに」

「・・・そうか」

５：門番と空中戦　スペカ合戦（後書き）

緊急時だろうとスペカルールは守らないといけません
先程の格闘戦の方が可笑しいのです

空中戦では美鈴の方が不利
スペカの方が美鈴にいくらかの勝率があります
それをきちんと把握した上で霧先はスペカ戦に持ち込みました
スペカの方がいくらか安全ですからね
結局途中で終わりましたけど
美鈴戦をこのまま長々しくかくのもなんだと思いまして

スペカ戦は誰にでも勝率があります
そして霧先はスペカ（というかＳＴＧ）が得意です

感想、賞賛、ご指摘、誤字報告をお待ちしております

6：スカーレット姉妹のすれ違い（前書き）

この物語
いや、書いているもの全てが習作です
ご指摘バンバンお待ちしております

６：スカーレット姉妹のすれ違い

［紅魔館内部］

紅魔館内部で戦闘を行う者が二人

その内一人の名は
レミリア・スカーレット
この紅魔館の主である

薄く、白みがかった青とも紫とも取れる髪色
そして紅い目をしており
全体を薄いピンク色で纏めたドレスの様な服を着ている
ひらひらとした帽子には紅いリボンが付いていて
見た目は可愛らしい幼子に見えても仕方がないだろう

だが、このレミリア・スカーレットは
５００年以上も生きる吸血鬼
背中には蝙蝠の様な羽根を持ち
人間の犬歯に当たる部分の牙が吸血鬼たる事を証明している

それに相対するは
フランドール・スカーレット
レミリアの実の妹であり
同じく５００年以上生きる吸血鬼

その血の繋がりを証明するかのように赤い瞳をしている
体を赤で、肩から先を白もしくはピンクを使った配色の
服を着ているをしている、今回は白を使っている様だ

吸血鬼である事を証明する牙
しかし羽根は、木の枝に
虹色の内藍を抜いた６色の宝石がぶら下がるような感じであり
とてもこれで空を飛ぶようには見えない

この幻想郷では空を飛ぶのに羽根は必要ないのであるが

＝ーーーーーーーーーーーーーー＝

大体月に一度、フランが地下室から出て
外出しようとしてしまう時がある
その度に力づくで地下室に連れ戻している

最近はその周期が一気に早くなり
１週間に一度、酷い時には３日に一度なんて時もあった

フランに外はまだ早い
力を制御出来るまでは迂闊に外に出すわけにはいかない

どうしても外に出たいというから
裏で色々やっているというのにこれだ

最近といえば、妖精メイドの間で
『一度、フランドール・スカーレットを殺す案が出たことがあるらしい』
という噂が流れたことがある
全く、４９５年も前の話を一体何処で聞いたんだか

御陰でこっちは精神的疲労でまいっている
私でさえこれなのだから
肉体的には人間である咲夜はもっと酷いはず
事実今回の戦いに咲夜はおらず、医務室で寝ている
精神的、肉体的の両方の疲労が着たんだそうだ
時には骨が折れた状態のまま戦っていた時もある
『無茶をするな』とあれほど言っておいたのに
（一体フランに何があったのかしらね・・・）
「ー＝ー禁忌『カゴメカゴメ』＝ー＝」
フランのその声と共に弾幕が展開される
空中に止まる檻の様な弾幕
今日も月に一度の時より密度が高い弾幕
さらに威力も全く抑えていない
どう見ても『弾幕ごっこ』なんていう遊びではない

余計な考えをしている暇は無さそうだ
今ここでフラン外に出すわけにはいかない
何か解らないけど切羽詰っている様子だから
一度逃したらきっと戻ってこない
そんなんじゃ私の計画が完了出来ない

だから余計なことを考えずに、止める
今はただそれだけだ

＝ーーーーーーーーーーーーーー＝

速く、早く外に出ないと『殺される』

二ヶ月前に妖精メイドの噂話を聞いてしまったのだ
『一度、フランドール・スカーレットを殺す案が出たことがあるらしい』

その証拠に
パチュリーの図書館を覗いてみたら
何やら準備をしていた
妙に大きい魔方陣もある

魔方陣を見てみると
どうやら封印の術式みたいだ

殺すことが封印に変わったのか
封印してから殺すのか

急いで逃げないと私が死ぬ、殺される
そうでなくとも封印される

咲夜は骨が折れたまま戦っていた時もあった
そんなに私を殺したいのか、封印したいのか

（どっちだっていい！　そんなの御免だ！）

「ー＝ー禁忌『カゴメカゴメ』＝ー＝」
私のその声と共に弾幕が展開される

こんな時までスペルカードを使わないと行けないのが
もどかしい

スペルカード以外に魔法の媒体に出来る物が無いのだ
一から作るなんて魔方陣の完成率からして時間が足りない

せめてもと全力を込める

余計なことなんて考えている暇は無い

姉が何を考えているのかは解らないけど
今までの情報は十分危険だと判断できる内容だ
一度出たら絶対に戻ってやるもんか

だから今はここから逃げないといけない
余計なことは考えずに、倒す

今はただそれだけだ

＝＝

「ー＝ー禁忌『カゴメカゴメ』＝ー＝」
フランのその宣言と共に弾幕が展開される
すごい密度と圧迫感だ
避け切るのはおそらく無理だろう

それの様子を俺は達観して見ていた

「おーやってるやってる」

「落ち着いてる場合ですか！？
妹様は完全にお嬢様を殺す気です！
ですから・・・」
美鈴が声を荒らげる

何をそんなに慌てているのか
俺は簡単に答える

「ですから、なんだ？
姉の方は特殊能力を除いて妹より強いんだろ
だったら何を心配する？
そんな簡単に殺される訳じゃないさ」

「殺す気で来ている事自体が以上なんです！
最近はずっとお嬢様の命でずっと門番をしていましたけど
絶対に変です！　何かあります！」

「あーはいはい、でも今は考えても結局答えは出ないよ？
これの戦いが終わった後に俺が二人と話をしてみるから
それから考えような」

「はい・・・」

この戦いが終わった後
先ずはフランと話してみるか

6：スカーレット姉妹のすれ違い（後書き）

子どもの思考が飛躍する事はよくあるお話です

7話：フラン　レミリア　それぞれ　（修正）（前書き）

色々試している最中です
意見をおまちしております

それと最中をモナカと呼んだ奴出てこい

7話：フラン　レミリア　それぞれ　（修正）

［紅魔館：地下室］
レミリアとの戦闘の後にフランは休息をとっていた
４９５年も親しんだ暗い部屋
羽根の宝石も塵もこの部屋では等しく輝かない
姉は何を思ってこの部屋にフランを放り込んだのか
それはこの部屋の中の物の様に暗く見えない
だが確かにあるはずだ
それを知っているのは閉じ込めた本人だけであろう
ここでフランは何を考えているのだろうか・・・

姉妹の戦いが終わったあと俺はフランドールの部屋に来ていた
と言っても地下室なのだが

フランドールは４９５年間地下室に閉じ込められていた
レミリア曰く、理由は「情緒不安定でいつ暴れるかわからないから」
真偽は定かではない

「お姉ちゃん・・・ううんレミリア
あの魔法陣は何？なんなの？教えてよ
ーーーなんで秘密にしているの・・・ーーー」

カンカン、とドアをノックする音が響く
ここのドアは金属製であるためこんな音が響く

「入るぞー」《ガチャリ》
そこにノックしたであろう男の人の声が聞こえる
そして返事もなしにドアが開かれる

「お兄さん、誰？」
フランは見知らぬ外来人に問いかける
服装を見れば外来人かどうかなんてすぐにわかる
少なくとも外来人は幻想郷にない服を着ているのだから

（姉ｓ・・・レミリアからここに来るなと言われてないのか
それとも言われててここに来たのか、どっちにしてもこの人馬鹿）

「フランドール、お前はどうしてあんな事やってるんだ？
見たぞ、屋敷が滅茶苦茶だ」

私がやったとでも言ったのだろうか
戦闘を見ていたのだろうか

（どっちでもいいか、それに話すくらいはいいと思う）
「実はね・・・」

そう前置きをして私は話し始める
チラッっとみた魔方陣のこと、散歩で聞いた噂のこと
そして私自身が思った事

私が何故こんなことを外来人なんかに話すのかは分からない
ただ知っておいて欲しかったのかもしれない

「なるほど・・・」
そう言って彼は部屋を出ていった
何をする気なのだろうか

[紅魔館：昔のレミリアとフランの部屋]
妹との戦闘でボロボロになったレミリアは休息をとる
４９５年前のレミリアの部屋でありフランの部屋にもなる筈だった場所
その証拠にベッドは２つあった
今レミリアの部屋は主の部屋、ここは誰も使っていない筈
しかし何故か綺麗に掃除されており４９５年前から何も変わっていない
果たして誰が掃除していたのやら
それを知っているのは掃除した本人だけであろう
ここでレミリアは何を考えているのだろうか・・・

「フラン、一体何があったというの・・・
４９５年も閉じ込めておいて今更だけどさ
ーーー姉を頼ってよ・・・ーーー」
ぽつり、そう呟いた直後に

コンコン、とドアをノックする音が響く
「お嬢様」
ノックしたであろう女性の声が発せられる
その声からレミリアは誰が来たのかを察した
「その声は咲夜ね、なんの用なの？」

「・・・お話したいことがありまして」
主に質問することに少しためらいがあるのだろうか

（まぁいい、聞きたいことがあるなら教えておこうじゃないか）
「いいわ、入ってきなさい」

「失礼します」
入ってきたのは
銀髪で横紙を三編みにした青に近い碧眼のメイド
［時を操る程度］の能力を持ち
この屋敷に住む唯一の人間でありメイド長
十六夜咲夜であった

レミリアは咲夜に質問する
「それで、聞きたいことと言うのは？」

「この前の運命予報についてですが・・・」

運命予報
それはレミリアの［運命を操る程度］の能力を用いて行う
占いみたいなもの
能力が能力なだけに的中率は高い

「私だってこんな過程は予想外
でも、いつかきっと・・・」
咲夜は目を瞑る
「わかりました、お嬢様」
そう言った後には部屋から出ていこうとする

「ちょっと待って咲夜」
それをレミリアは呼び止めた

「なんでしょうか？」

「今日は命令を出さないわ、お願いはするけども
だから自由にしてなさい」

「かしこまりました」

今度こそ咲夜は部屋から出ていった

これも運命予報でそうしたほうが良いと出たからだ

一人になった部屋の中
レミリアは一息つく

「ふぅ、それにしても最近咲夜がよそよそしいのよね
フランが暴れ始めた辺りからかしら
いや、能力封印の魔方陣をパチュリーに頼んだ当たりから？
最近紅魔館がおかしい・・・」

おかしい理由は些細なすれ違いなのだが

「でも運命は変わっていない
それと、あの外来人はなにかおかしい
違和感というかなんというか・・・」

その疑問は晴れることなく消えた

８：散歩　メイド長　未公開真実（前書き）

神霊廟ハードは残機４つ残してパラレル行けるくらい楽勝だけど
ルナはまだまだなｘｘです
エキストラも楽勝

本日も妄想を垂れ流し

そして毎度の様に修正

なんとか楽しめるようにしたいですが
やはり妄想や修正の読み直しがきつい方は読まないほうが良いかもしれません

ハーレム成分は皆無であることもお忘れなく

ここのおぜうは子どもですが当主です
ここはフランも子どもです
ここの咲夜は保護者です
読む方が楽しめるように頑張っていますがまだまだです
以上が許容出来る方はお読みください

8：散歩　メイド長　未公開真実

［紅魔館：廊下］
紅魔館の廊下は外側からは想像も出来ない程に広く長い
そも、廊下だけではないのが
そこを一人の外来人が歩く、本人曰く散歩だそうだ

「う～ん、あれはフランの見解だし
別の視点もないと判断できないなぁ・・・・
全部フランドールの勘違いなんてこともありそうだ」

あってたりする

そして霧先はそんな推測をしながらある人物を探す

「んで、それにはレミリア側の人間が良いんだが」

『レミリア側』それはレミリア本人ではない事を指す

「よく知ってそうなのは・・・」

いつもレミリアの傍にいるメイド長の人間
十六夜咲夜、あのメイドならなんか知ってそうな気もする

「あの」

噂をするとなんとやら
向こう側から声をかけてきた

「なんだ？　こっちもあんたに用があったから
丁度良いっちゃ丁度いいが」

すると、意外な答えが
・・・何も推測していないがとにかく予想外だった

「少し愚痴を聞いていただけませんか？」

「なに？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

愚痴の内容は結構重要なものも含まれていた

「お嬢様は運命予報に頼りすぎです」とか
「きちんと妹様に全部話しておけばいいのに」とか
「驚かしたいのは解りますけど」とか
「４９５年前の事もですね・・・」とか

そんな事を愚痴りまくるのだ
結局４９５年前のこと全部聞いてしまった

「お嬢様ったら私にも話さないんですよ？
私が過去に戻って確認でもしなかったら勘違いしたままでしたよ」
「おいちょっと待て、お前過去に戻れたのか？
というか過去に戻るってことは時間をどうこうしているのか？」
知ってはいるが聞いておかないと不自然だろう
そして咲夜の能力［時間を操る程度］は原作で
事実上戻すことはできなかった設定のはず
「過去の私とぱったり出くわしたりしたらアウトですけど
私自身が戻ることは出来るんですよ」
ここ独自の設定か
「へぇ・・・で、手品師（マジシャン）が種明かししていいのか？」
「確かに私は種無し手品が得意ですけど・・・何処でその話を？」
「美鈴とかフランドールから聞いたぞ？」
危ない危ない、まぁバレてもいいけど
やっぱり初めから知ってたら不自然だからなぁ
「・・・・・・・」
完全に疑惑の目だこれ
「さいなら～」

まぁ、別のことが流せたしいいか

「と、その前に」

「なんでしょうか」

いくらなんでも今の咲夜は可笑しい
原作設定だとか二次創作のイメージからあまりにも離れている
今までは原作から離れていても二次創作のイメージの内には入っていたのだ

「なんでそんな話を俺に？」
だからこんな質問をしてみる

「あえて言うなら
お嬢様が『自由にしてろ』と仰ったからです」

さり気に今の愚痴が話だと言ったよこいつ

８：散歩　メイド長　未公開真実（後書き）

４９５年前の真実
それは後に明らかとなります
今読者に伝わっても勿体無いですから

9話：主の間　威圧　（前書き）

駄目だ、まだ書ききれていない・・・・・
そんな状態で投稿してしまった

まだたりないかもしれない

9話：主の間　威圧

［紅魔館：主の間］
『主の間』という名の通り
紅魔館の主が使う部屋である
その内装は非常に豪華であり贅沢
その部屋に入っただけで威圧されてしまう位に

そこに霧先は呼ばれた、美鈴と一緒に
何の用があるのだろうか

ドアをノックし、入る
「入るぞ」　「あ、ちょっと！なんでいきなり入るんですか！？」
美鈴が声を上げるが
もう入っているものは仕方がない

入った瞬間に驚くことになった
何故なら紅魔館の主要人物が揃っているのだから

紅魔館の主であり、古来から恐怖の対象である吸血鬼
レミリア・スカーレット

「ノックには答えてから入るものよ、外来人」
この館の主であるレミリアが口を開く

その時の仕草や言動、その一つ一つに吸血鬼
すなわち人外を示すカリスマが込められていた

目の前にいるのは吸血鬼
見た目は幼い子どものようでも紛れも無く吸血鬼なのだ

「答えたぜ、自分でな
でだ、今俺はは外来人として呼ばれたんだな？」

こう言っている間にも周囲から来る威圧感が凄い
例えば

「自分で答えてすらいないじゃないですか」

紅魔館のメイド長十六夜咲夜
紅魔館に仕える以前の記憶を全て失っており
その過去には様々な説が飛び交う時を操るメイドである

人間の中ではかなりの力を持っている部類であり
その力はスペルカードルールにも使われる

「まるで、うちの図書館に時々盗みに来る
白黒の、自称普通の魔法使いみたいね」
そう言えば今まで出てきていない人物が居るな

紫色の髪の毛に紫色の瞳、寝巻きのような紫色の服で統一されたまさに紫色ずくしの少女
その肌は白く、とても日に当たっていたとは思えない
実際に日に殆ど当たっていない

被っている帽子には月の形をした飾りが付いている
流石に飾りは紫色ではないが帽子も紫色

お洒落なんて殆ど考えていないだろうに綺麗に着こなし
そして凄く似合っている

パチュリー・ノーレッジ
『七曜の魔女』『知識と日陰の少女』などの二つ名を持ち
『動かない大図書館』などとも呼ばれる
恐らく幻想郷において一番魔法に長けた人物がそこにいた

ちなみに喘息持ちで図書館に篭っており
いつも図書館の本を読み漁っている

話が逸れたが、今レミリアは外来人と言った
だから俺は今そういう風に扱われているのだろう

「そうね、そんな事はどうでもいいの」
即答、それもどうでもいいと来た

少し苛立ちながら質問を続ける
「何の用があって呼んだ？　用が無いのなら去る」
＜苛立ってます＞というアピールをする

少し苛立っていると認識させれば
話を焦らされる事もないだろう

「そう慌てないで
用というのはフランを止めて欲しいの」

「フラン・・・フランドールの事か
お前の妹で吸血鬼だと聞いたぞ
『外来人如き』では力不足ではないか？」

外来人如き、を強調する
チート現場（テンプレで神の部屋）でとことん、血の滲む様な
血が吹き出た、狂ったように、実際に狂って
鍛錬、訓練、修練、修行、奇行
を積んでいる俺なら今更吸血鬼程度どうとでもないが
それをやった自分はマゾだろうと言われても文句は言わない
だが俺はサドだ

また話がそれてしまった
とにかく彼女らに対する俺の認識は『外来人』で間違いない筈

「フッフッフ・・・聞いたわよ
あんた博麗大結界をぶち破って来たんでしょう？」

何処で聞いたのか？　八雲紫だろう
そいつ以外に知っているとは思えない
妖精メイドが住んでいるから
それごしに情報が来ていても可笑しくないが
いくらなんでも伝達が早すぎる

妖精というのは飽きっぽいのだ
もちろん仕事についても

だが伝わっているのは事実、修復したのもか？
いや、多分それはない

多分説明は『博麗大結界を自力で超えてきた』だけだろう
何故なら『斬り開いて』来たからである
『ぶち破って』などいない

「『ぶち破って』などいないですよ」

「・・・とぼけているのかしら？」

ビンゴ、ここは娯楽の乏しい娯楽に飢えた幻想郷である
そんな所で言葉遊びが無い訳がない
故に言葉には気を遣う筈、自分の言葉で遊ばれぬ為に

その理由は時期に説明しよう
最も、その時期はすぐに来そうだが

「まぁいい、どっちにしても弾幕ごっこは知っている筈
美鈴と弾幕ごっこやったそうね」

美鈴か、咲夜か、妖精メイドか
どうでもいいか

「あぁ、結果は時間切れ（タイムアップ）だが」

弾幕ごっこについては以前説明したと思う
ＳＴＧみたいな戦い方をする幻想郷の決闘ルール
被弾させても決着つかない場合は
弾幕の鬱苦しさや美しさ、そして弾幕の避け方の華麗さでも決まる

時期が来たので説明するが
スペルカードを唱えた時に張る弾幕は
勿論使っている人が考えた弾幕だ

魅せる時、難しくする時、避ける時その全てに頭を使う
結局頭のいい奴が凄くて美しい弾幕が張れるというわけだ
弾幕ごっこを始める前に
必ずと言って良いほど前口上がある前口上をするのだが
頭の良さ、つまり実力を測る時にこの前口上は丁度いい

弾幕ごっこは遊び、言葉遊びも遊びであり決闘は弾幕ごっこ
実力を計られるので言葉には気を遣う
つまりはそういうことだ

さらに言うと上位陣の能力での戦いは言葉遊び同然
それが出来なければ能力の戦いでも負ける

そんな事を考えながらも話は進む

「十分、今度の脱走は美鈴と行ってもらう
戦い方はある程度分かっているでしょう？
こちらで無事なのは美鈴だけ」

なるほどぉ～それで私をずっと門番に置いたままにしてたんですね
などと言っている美鈴を無視して話は進む

「話が飛躍しすぎだ
いつ俺に承諾をとろうとした？　いつ俺が承諾した？」

そう、話が飛躍していた
弾幕ごっこの実力から承諾した流れに

「拒否権があるとでも思ったのかしら？」

そうレミリアが言った途端に
威圧するためか、妖力が垂れ流される
・・・成程、これが吸血鬼か
「・・・拒否したら・・・・どうなる・・・・・」
威圧されたように、言葉を詰めて言う
「さぁ……どうなるのかしらねぇ？」
言いながらも威圧を緩めない
『どうなるか解るか？』そう言っている様だ
吸血鬼の館、主の間、そして集まった主要人物
そうか・・・俺の予想が正しければ・・・・

9話：主の間　威圧　（後書き）

さて、どうでしょう
想像してみてください
推測してみてください
次回
約束『カリスマブレイク』お楽しみに

１０：笑撃　衝撃　驚愕（前書き）

真実の公開は次話になりそうです

１０：笑撃　衝撃　驚愕

［紅魔館：主の間］
そこには、フランドール除く紅魔館の主要人物が揃っていた
紅魔館の門番・時を操りしメイド・小さな吸血鬼・七曜の魔法使い
霧先はそこに呼ばれたようだ
一部を除き、怪我をしているとはいえ幻想郷一勢力のメンバー
レミリアを主にして、その者達が放つ威圧もそれ相応なものだった

そのプレッシャーを受けている霧先
そう、霧先はプレッシャーを受け

「何も考えていないだろう？」
てはいるが効いてなどいなかった

「へ？」
レミリアから驚きの声が漏れる

『何を言っているんだこいつは？』
周りからそんな視線が突き刺さる

「だから、俺が断った時に何をするか考えていないんだろう？
だって『俺は絶対に受ける予定』だったからな
だから受けなかったら俺をどうするか考えていないし
それをする余裕もない……違うか？」

豪華な部屋に呼び威圧、力のある者を呼び威圧

そして言葉巧みに威圧(プレシャー)をかける
よく考えればハッタリの常套手段だ
霧先は「あ、こいつ何も考えてなさそうだ」
と思ったからこの発言をしたのだが
図星だったようである

「え、あ・・・う～その、あのね
・・・ってパチュリー！なんで笑いを堪えているの！？」

「プククク、ちょっとレミィ……ププ……え、あ・・・う～☆って
喘息の……ふふ……発作を起こさせる気……はははｈ《ゲホッゲホッ！》
ははははは・・・だめ、喘息あるのに笑いが止まらない」
パチュリーは笑いが堪えられなくなったのか
喘息の発作を起こしてしまった

「ちょっとパチェ大丈夫！　でも笑うことないじゃない！
そりゃ私は何も考えていなかったけどさ
う～☆なんて言ってないってば！　☆(ほし)なんてついてない！
って聞いてるの！？」

『レミィ』『パチェ』というのはレミリアとパチュリーの愛称で
そんな風に呼び合えるのは親友位だ
勿論原作でもレミリアとパチュリーは親友である

俺の横にいて笑いをこらえていた美鈴の頭に
いつの間にか現れたナイフが刺さる

咲夜の仕業だろう
『時を操る程度』の能力で時を止めてナイフを投げたのだ
多分「主を笑うとは何事か」という意であろうが
咲夜も人の事言えないと思う

咲夜の歯に力が入っているーーー笑い堪えているのが解るーーー
それに時を止めた間に大爆笑していても可笑しくない

この場は笑いに包まれていた
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「はぁ・・・はぁ・・・なんとか場が収まったわね」
レミリアは場を収めるために声を上げたりして疲れたのだろう

笑いを堪えているのが約1名・・・咲夜だ
今も思い出して笑いを堪えている

あそこでレミリアが凛としていれば
ここまでの事態には成らなかったた筈だが
レミリアの自業自得だし楽しかったので良しとする

「本題に戻ろう
用は『フランドールがもうそろそろ暴れ出しそうだから止めて欲しい』

で合っているんだよな？
だったら受けてやってもいい」

話が飛び飛びしていたがこれだけはハッキリしていた
だから多分これが本題で合っている筈だ

「えぇ、それで合っているけど
じゃぁなんでさっきは渋るようなことを言ったのかしら？」

レミリアは俺が渋っていたのに
『受ける』と突然態度が変わったものだから疑問に思っている様だ

そういうのは疑問に思っても表に出さないものなんだけどね

本気のやり取りでもないし答えるとする
というか知っていてもらいたいし

「簡単な話、あんたは報酬の無い『お願い』をする側なのに
上から目線それに少し苛立ったから少し渋ってやった
そして元から受ける気だったから受けた・・・それだけさ」

レミリアは目を丸くして驚いている
そして少し考えるように目を瞑った後
座っていた椅子から降りた

そしてその後レミリアの行動に驚く事となる
親友であるパチュリーも、目を覚ました美鈴も
そして生まれた時から仕えてきたと言っても過言ではない咲夜も

「・・・それは確かに私の方が悪かった、ごめんなさい」
そう言って頭を下げた
外来人に初めて頭を下げたのだ

親友であるパチュリーに頭を下げたことは何度かあった
しかし他人に、それも外来人に
頭を下げたことなどこれまで一度もなかったレミリアが、である

・・・これには俺も驚いている
原作は言わずもがな、二次創作の小説や動画でも
レミリアが頭を下げた所なんて一度も見たことがない
それがここまで誠心誠意に謝罪をするとは思ってもいなかった

（・・・単なる話の掛け合いで終わると思ってたんだがな）

思わず驚きの表情を表に出してしまう
すぐに隠したその驚きの表情を
頭を下げているレミリアに見られることは無かった

そして済ました顔で告げる
「それでいい」と

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

［紅魔館・主の間］
霧先が退室した後
レミリアは一番の信用を置く咲夜と話をしていた

その内容は先程の『お願い』の事
傍から見たら姉妹の会話にも見えなくはない

「はぁ～」
レミリアが一つため息をつく

「お嬢様、どうかしましたか？」
そのため息に心配したのかしていないのか
咲夜が質問する

「咲夜」
それにレミリアは
レミリア自身が与えた名を呼ぶことで返した

「なんでしょうか？」

「私は紅魔館の主として、その・・・うまくやっていると思う？」

「今はまだ未熟です」
『今はまだ』それにどんな意味が含まれているのだろうか

レミリアは考えこそしても察することは出来なかった

「そう・・・今まで似たような質問には無言で返していたのにね」

「・・・・・・」

「沈黙か・・・それにしてもあの外来人
相当なものね、まるで全部仕組んでいたような」
まるでこの私を謝らせる為にあそこまで仕組んだような

と、レミリアは思う

「それは違いますお嬢様」

「なに？」

違うと思います、ではなく違いますと断言した咲夜に

驚き反応するレミリア

「彼はお嬢様が謝罪をしていた時に

僅かながら驚いておりました

あそこまでの謝罪は想定外かと」

霧先の横にいて表情が見えなかった美鈴も

驚きすぎてそこまで気が回らなかったパチュリーも

レミリアは言わずもがな、気付かなかった事実

それに咲夜は気づいていた

「そうか・・・・」

それ以上の会話は無かった

また、必要もなかった

１０：笑撃　衝撃　驚愕（後書き）

感想お待ちしております

１１：爆発　轟音　魔理沙（前書き）

久しぶりかな？更新は

１１：爆発　轟音　魔理沙

［紅魔館：ヴワル魔法図書館（仮称）］
ここは主にパチュリーが引き篭っている図書館
人間が何回転生しても読みきれないような量の図書があるここで
パチュリーとパチュリーが召喚した使い魔の小悪魔が住んでいる
その棚にある本は棚も含めて強力な防護魔術がかけられており
大妖怪が全力で攻撃するか能力を使いでもしない限り傷一つつかない

≪ヴワル魔法図書館≫は紅魔郷プレイ時の４面ＢＧＭなので
正式なこの図書館の名前ではない
この図書館に名前は無いかもしれないが
それはパチュリーしか知らない

そしてこれは霧先がレミリアから依頼を受けた後の数日間のこと
調べものをしにここに来ていた

「しっかし大きいなー、俺の記憶倉庫何分の一だろうか？」

霧先は転生前の半チートで異世界や並行世界の
ほぼ全ての知識を保有する
情報がある場所に飛ばして貰い自力で知識にした
残念ながら新しく生まれた物は知らないが
どう考えても可笑しい
その情報を知識に変える為に一体どの位費やしたのか

それは霧先自身もよく覚えていない

「と言ってもそれを記憶し続ける為にチート使ってるんだけどね・・・」

チート、神に与えられた訳ではないけどチート

「与えられてないからチートでは無いかもしれんが」

大図書館を見ながらそんな思考に浸っていると
声をかけられる

「あの、お客様？
ここに何か用があって来たみたいですけど・・・何のご用ですか？」

その声の主は、赤髪赤目の司書服を着た少女だった
しかし蝙蝠みたいな羽根がいかにも「悪魔です」と語っている

紅魔郷４面中ボス、小悪魔である

しかしこの小悪魔は色々と謎で、本名は明かされておらず
ゲームでは弾幕で隠れるので姿を知るにはボムる位しかない
そして姉妹で働いているだの色々二次創作で色々考察されている

俺の目の前にいる小悪魔一人だし
周りには妖精が多いわで真実はわからない

「ちょっと調べものをしにね
『妖怪について』なんて本はないか？

ここまで本が多ければそういうのもあると思うんだが」

「ありますよ？　でもそういうのは
人里の稗田さんの方があると思いますけど」

う～んでも俺が居ない間にフランが暴れ出したりしたら
色々と良くないし、俺が知りたいのは妖怪全般の事だから個人じゃ
ないし

そのことを小悪魔に伝えると

「わかりました、では持ってきますのでしばらくお待ちください」

そう言って飛んでいった

態々調べ物をする必要が有るのかと聞かれそうだが
その答えはＹＥＳだ

平行世界だの色んなことをゴチャゴチャにしているから
似たような世界でも違う点があったりして
それを調べるのに時間がかかる
それに俺が覚えた時より時間がたって変わっているかもしれんし
念のため

そんな事考えながら時間を潰しながら待っていたが限界だ

（小悪魔が本を持ってくるまで時間を持て余すな・・・
ん、あれは・・・・本？）

そこには一冊の黒い本が開いたまま落ちていた
パチュリーや小悪魔が本を粗末にするとは思えないし
防御術式も施されていない、新しく幻想入りしたものか？

「えーっとなになに【爆発の記録】？
・・・なんかギャグみたいな題名だ」

折角だからこの本を読んで時間を潰そう

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

本の内容を纏めるとこんな感じだった

1：思いつきで大量の全属性の魔力や妖力とかを混ぜてみたら
何かが歪んだ気がした
2：歪んだ「何か」に小石を投げ入れたら大爆発を起こした
3：家がクレーターに
4：幸い念の為と使っておいた防御術式が役に立って怪我せずに済
んだ

この時点でヤバそうだが俺は余計に興味をもった
何故ならこれを「知らなかった」からだ
異世界や並行世界の情報を纏めて記憶している筈の俺が、である
つまりこれは俺が記憶した後に発見されたもの
少し興奮するのは仕方がないだろう

５：家がクレーターになってしまって研究の材料などがお釈迦になったが
今までの研究は頭に入っているしこの研究も面白そうだから良いだろう
６：霊力なども入れると更に大きい爆発が起きた
種類は多いほどよさそうだ
７：どうやら魔力の方向なども関係しているらしい
乱せば乱すほど爆発が強くなったが全くもって安定しない
強いときもあれば弱い時もある、どういうことだ？
とりあえずカット＆トライでやっていく

その後は試した比率や
どの位かき回したら威力が上がった、下がった
など１００万では足りない位に続いている

・・・・・・これはまさか

８：とうとう寿命が尽きてしまうようだ
魔法使いとしてこれだけの研究が完成させられないのは悔しい
そしてこの記録を残すとしよう
後世のものに役に立つのなら嬉しい

本の背表紙を見てみる
。・×、ー＝ノー１：ジ
名前の部分は掠れすぎてよく読めないが
苗字の部分は掠れても残っているインクから推察するに
・・・・・“ノーレッジ”！？

おいおい待てよ、これパチュリーのご先祖様の本か！？

俺が驚いていると突然轟音が鳴り響く
おいおい、まさかもうフランがおっぱじめたのか？

「パチュリー様！　侵入者です！」
「わかったわ・・・どうせ何時もの白黒でしょう？」

白黒・・・魔理沙か

魔理沙・・・霧雨魔理沙、自称『普通の魔法使い』人間である
今のように図書館を襲撃して本を無断で死ぬまで借りていく
本人曰く「魔法使いと人間じゃ全く寿命が違うだろ？」とのこと
まぁどう見ても盗んでいっているのだが

本だけでなく他人の技まで盗む、別に悪いことじゃないけど
彼女の十八番である“マスタースパーク”も
元々は風見幽香の技である

見た目は金髪で白黒の箒に跨って飛ぶ
いかにも『魔女』という格好をしている少女だ
口調も性格も男勝り、「弾幕はパワーだぜ！」とのこと
現にマスタースパーク（略してマスパ）は
極太の極大レーザーである
その強化版や応用でファイナルスパークやブレイジングスターなど
もあり
単純なだけに避けづらく、彼女の弾幕を避ける者は皆「鬼畜」と称
する

「俺が行く！　遊びと時間切ればっかりでどうも消化不良なんだ」
「いってらっしゃい、確か名前は・・・「霧先、霧先涼だ」
・・・なんか『霧雨』みたいで嫌な響きだわ」

「確かに似ているな、偶然だけど
弾幕ごっこをやるが本は大丈夫か？」

知っているけど心配する
平行世界ってことで何か違うかもしれないし

「大丈夫よ、本には防護魔法がかけてある
弾幕ごっこ位なら傷一つつかないから
・・・・ん？　その本は何かしら？」

「あぁ、どうやらお前の先代かご先祖様の本らしい
爆発の記録だってさ、何か家がクレーター になったらしいよ」
「！っ・・・・・」

ん？何か思い入れでもあった代物かな？
さてと、魔理沙撃退にいくとしますかね

12：魔理沙　初見殺し　味覚

［紅魔館：廊下］
霧先がのんびり調べ物をしている時に侵入者、襲撃
その正体は恐らく『霧雨魔理沙』自称、普通の魔法使ぃ
紅魔館では結構日常茶飯事だし弾幕ごっこなので
流血沙汰にはならないので安心しておくといい

本は盗まれるかもしれないけどね

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

んで今、目の前にいるのは予想通り霧雨魔理沙
箒に乗った白黒のいかにも「魔女です」という服装をした金髪少女
・・・というのは前話で説明したと思ぅ

「よう白黒の魔法使い、よく来たな」

「お、私のこと知ってるのか？　見たところ外来人みたいだが」

「いや、あんまり知らないな
まぁパチュリーから滞在料代わりに盗人退治を頼まれてるんでね
悪いが俺の相手をしてもらう」

魔理沙め、新しい遊びを見つけた子どもみたいな目をしやがって

「じゃぁ弾幕ごっこという訳か？　面白い、蹴散らしてやるぜ！

先ずは小手調べだーー魔符『ミルキーウェイ』ーー！」
宣言の後魔理沙から9方向に星形弾が
使い魔が五体、五芒星の頂点に位置するよういい出現
そして回転さらに辺りからも小さな星形弾が漂ってくる
しばらくすると使い魔から小さな星形弾が3ｗａｙ5連射
3ウェイの角度が非常に狭い為その間に隙間は殆どない
魔理沙は蹴散らすと言ったのに小手調べ
相手が外来人だからこれで沈むだろうということか？

こちらは「その程度余裕だ」と言わんがばかりに
ほぼ隙間なく放たれた弾幕の隙間を抜ける
ほぼ隙間が無いと言っても体を入れる位はどうにかある
それを繰り返す内に魔理沙のスペカが時間切れ

「あんまり甜めないでいただきたい」
「そりゃすまなかったな
初見でノーマルスペルを抜けるとは・・・大した外来人だ
ーーー光符『シュート・ザ・ムーン』ーーー！」
・ザ・の部分が顔文字に見えた方、末期です
何がとは言わないが

ともかく魔理沙が宣言すると、まず使い魔が４体端に放たれ
地面にたどり着くと上方に赤と青のレーザーを放つ

これはそもそもこちらを狙っていないので当たらない

５ｗａｙの小☆型弾自機狙い
それも速い・遅い・中くらいのすべてを重ねた自機狙い
結構の連射なので殆ど隙間がなく
抜けようにも抜けられなく思える

これにはチョン避けで対応

さらに先程レーザーを放ったの使い魔がばらまかれ
こちらから見て左側から着弾
その順に青いレーザーが放たれ消える
また先程レーザーを放ったの使い魔がばらまかれ
次にこちらから見て右側から着弾
その順に赤いレーザーが放たれ消える

これはタイミングを見ながら少し大きく動いて抜ければいい

隙あらば二連続の宣言か、それもＨＡＲＤ
あまり消耗はしたくないのだろう

それより問題なのが
俺が廊下の中央に居る時にこのスペカが始まった事
いくらチョン避けでも限界があり

このままでは廊下の端まで追い詰められてしまう
その前に切り返す事にする、少しキツいが大丈夫だ
「はっ」とかなり大きく動く
そうすると自機狙いの小星形弾の狙いも大きく動きばらける
こうなればバラ撒き弾と同じである
密度が高いがほぼ一直線になっている時よりマシだ
そこを抜ける・・・・・成功

「おいおい！　これを切り返すのかよ！？」

そしてそのまま時間切れへ持ち込んだ

「ふぅ・・・次はこっちの弾幕を受けてもらう
ーーーー戦慄『一次元の猛威』ーーーー」
俺の背後に多量の魔方陣が出現する
そしてその魔方陣全てから一斉にレーザーが放たれる
廊下を埋め尽くす様に一直線に
この時点では抜ける隙間などありはしない
だがこのままでは弾幕ごっこのルール違反
そんな初歩的な事は分かっている
次からが問題だ

放たれたレーザーが曲がる
所謂「へにょりレーザー」という奴を魔方陣は放っていたのだ
そしてもう一度曲がることでまた廊下に隙間が無くなる

「ほぅ、一射のレーザーがこの
曲がって戻るを繰り返え・・・・・さない！？
初見殺しかよ！『スターダストレヴァリエ』！」

そう初見殺し、あの時点で魔理沙の1ボムは確定していた

「・・・・・もう怒った、こっちだって考えがある」

「普段“弾幕はパワーだぜ！”とか言っているお前がか？」

『弾幕はパワーだぜ！』は魔理沙の名言だ
その名言とは裏腹に、結構考えられた鬼畜な弾幕を使うのだが

「誰から聞いたんだ？・・・まぁどうせあの文屋だろう」

文屋・・・一射命丸≪しゃめいまる≫文≪あや≫
天狗、幻想郷最速、パパラッチ
後は出会ったときにでも説明しよう

「情報は大事だからな」

「だがあの文屋の情報は当てにならないぜ？」

「当てになる情報だけ抜き取りゃいいんだよ」

「ほう、それは言いことを聞いたな・・・と話が逸れたな
私の策ってのは単純明解、至極簡単なことだぜ」

「それは？」

「それはだな・・・・デカイ魔法ぶっ放して押し通る事だ！
ーーー恋符『マスタースパーク』ーーー」

宣言と同時、半場不意打ち気味に極太のレーザーが放たれる
魔理沙の十八番『マスタースパーク』だ

魔理沙の手に持たれたミニ八卦炉はヒヒイロカネで出来ており
そこに貯められた魔力は極太の熱線魔法に変換される
多量の熱線はそれだけで暴力と化し絶大な威力となる

対してこちらも

「ーーー魔流符『魔力の流動』ーーー」

これで応戦、こちらからは水のような魔力が俺から放たれる
この数日で俺の魔力は回復していた

片や高密度多量の熱線魔法、片や純粋な水の様な魔力の流動
その二つが今、衝突する・・・・・・

・・・・・・事は無かった

「え？」「は？」

片や魔力でも水で片や熱線でも光、光が水の中を通るのは当然
二つの攻撃は元々向けられた対象に向かってそのまま突き進む

「ぐっ！」
こちらには透明な魔力で多少は屈折したとはいえ
マスタースパークがそのまま襲いかかる
熱い熱い

「のわーーーー！！！」
一方魔理沙は突然の事にそのまま魔力に押し流されたらしい
少々魔力がかき消されていたが
やはり透明だったのがこの事態を招いたのか
殆どがそのまま魔理沙に襲いかかる

殺すことを目的といていない
水ではないので蒸発して煮えたぎっているなんて事もない
だから大丈夫だとは思うが・・・

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

しばらくすると流された魔理沙が戻ってきた

結構フラフラとした飛び方
服もかなり乱れている

そしてこちらが無事であることを確認すると
「マスタースパークで無傷とかお前本当に外来人かよ」
そう落胆の色を見せた
「咄嗟に魔力防御壁張った防御越しに火傷させてくる

お前の火力も大概だ、それも治療魔術でなおしといたが
・・・俺の魔力のお味はどうだったか？」

それに言葉を返し、そっちの方はどうかと聞いてみる

「甘かったり苦かったり塩辛かったりで散々だ
しかも結構飲み込んじまってさ・・・・・
この通り魔力制御が無茶苦茶だぜ」

「そりゃ本当に災難だったな
てか本当に味が付いていたのかよ」

俺にはそっちの方が驚きだ

「他には酸っぱかったり辛かったり渋かったりもしたぜ」

「ほぼ味覚全部じゃないか」

無いのは旨みだけだったな

「はぁ、こりゃ今回は本は諦めるしかないか・・・」

「そうするといいさ」

「そうするか・・・・あっ、でも収穫はあったぜ」
突然思い出したように明るくなる

感情の突起が激しい奴だな

「ほう、何が良いことでも？」

大方予想はついている

「魔力には味があるってことだ、これは調べる必要があるぜ」
早速帰ったら調べないとな
そう言って魔理沙は帰っていった

かくして魔理沙を撃退した俺は
いつか来るフランの暴走をどうにかする為に
また魔力を回復させていった

［紅魔館：ヴワル魔法図書館（仮称）］
霧先はフランドールの話にあった魔方陣を調べに来た
建前上は『妖怪についての本をまだ渡してもらってなかった』として
・・・実際には両方なのだが

「小悪魔ー！」

「はいはーい
『全ての妖怪における基本的な事』でしたよね
それならこれです・・・っと！」

ＺＵＮ、いや≪ズン・・・≫という―ＳＥ≪効果音≫がつきそうな

量の本だ
全て視認するには首をかなり上げる必要がある程多い
流石にこれを全て読むわけにはいかない多過ぎる

と言うかそれよりこの量の本を一度に持ってきた小悪魔は流石悪魔
ざっと見積もっても１５０Ｋｇはありそうだ
俺では魔力や霊力などの強化なしに持つ事は無理だ

「その中から妖怪と見た目との関係の本が欲しいんだが」

「ここから絞るんですねー
まぁそうだと思って全部持ってきたのですが」
そういう小悪魔は明らかに不機嫌だ

こんだけの重労働をさせておいてそのいくらかが無駄なのだ

「すまん」

「いいですよ
替わりになんでこんなことを調べているのか聞きたいですけどね」

流石小悪魔、催促が露骨だ

「レミリアのお嬢様は５００年も経っているのに
なんであんなに小さいんだろう・・・と思ってね」
嘘は言っていない

「あはは・・・納得です、でもご本人の前では禁句ですよ？」

「解ってるよ、だからここで調べたんだ」
「ここでは常識ですけど外ではあまり知られていませんもんねぇ」
成程ここでは常識か
「常識というと？」
「妖怪は心、すなわち精神に依存してて
人間は体に依存しているということです
これは生まれにも関係するのですが
妖怪は自分が弱い思ってしまったらかなり弱体化してしまいます
自分が弱いと思っていても人からの恐怖が大部分ですけど
自分が強いと思っていたほうが強いんですよ
人間はそこらへん体に依存していますね」
「面白そうだから続けてくれないか？」
知識のすり合わせ的に人の話は必要だ
自分の認識が重要ってのは興味深い
「はい
これは容姿も関わってきます
しかし容姿に関しては人の認識はあまり関係なく
本人の精神が具現化するみたいですけどね
そして種族の特徴から大きく外れる例は
特殊な事情を除いて聞いたことがありません」
三行で纏めると
１：人の恐怖はかなり大きいが、自分の認識も大きい
２：容姿は本人の精神が大部分

3：いくらなんでも種族の特徴から特殊な事情でもないと離れないということだな

「成程な～・・・でもさ」

「なんでしょうか？」

「今ので大体知りたいこと知っちゃたんだよね」

「あ！」

「なんかすまん・・・・・」

「良いですよ、はぁ」

なんか気まずい

「すまんがパチュリーの所まで案内してもらえるか？」

「パチュリー様は今取り込み中でして・・・」

「うん知ってる、何を取り込んでいるのか知りたいんだ」

フランドールの魔方陣の事ね

でもフランドールはどうやって入ったんだろうか？

「ダメですよー！　中に入ったらパチュリー様に叱られてしまいます！」

御仕置き怖いんですよー！　と小悪魔が必死に羽根をバタつかせてる

可愛い・・・じゃなくて

案内してもらえるように説得することにする

「パチュリーが何やってるのか・・・知りたくないか？」

取り込み中・・・詰まり小悪魔に内容は
知らされていないのだろうと踏んだ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

霧先さんの私の好奇心をうまく突く話術
そして何より自身の好奇心に負けて
うまく丸め込まれてしまいました

・・・でも教えてくださらなかったパチュリー様も悪いんです

「パチュリー！　何やってんだー！？」

ちょっと待ってください！
なんで魔理沙さんそっくりの声なんですか！？

そっくりって言っても声の高さを変えて口調を真似る位なので
よくよく聞けば声質が違うことは分かります・・・けど

「っ！　騒音が無かったから気付かなかった！」
もう対応が反射神経レベルになっているパチュリー様には
聞き分ける間なんて有りません

「ここに入られるわけには・・・？　魔理沙が居ない？」
あぁ・・・先程のパチュリー様の慌てている姿と
今の？マークな表情は永久保存ですね！

「そんな技能何処で覚えたんですか？」

「趣味で覚えた、使える場所はあまりないんだけどね」
こんな面白くなる事を趣味で覚えてしまうなんて
やぱり霧先さんはすごいですね！

パチュリー様の恐ろしい怒りを感じます・・・・・御仕置き寸前の

私はギギギギ・・・という
あまりの緊張で可笑しくなってしまった首をなんとかパチュリー様
に向けると
外の世界でいう『油の切れかけたブリキ人形』でしょうか

「小悪魔？　ここには誰も連れてこないでって言っておいたじゃな
いの？」
不気味な程の笑顔を浮かべたパチュリー様がいました・・・

霧先さんは既に居ませんこれは逃げましたね？　裏切り者！
「小便は済ませた？神に祈りは？
図書館のの隅でガタガタ震えて許しを請うする準備はＯＫ？」
「いえ、図書館の隅はここからかなりありますし
私は仮りにも悪魔ですから神にお祈りはちょっと・・・・・」
でも出来るなら祈りたいです、切実に
「へぇ、軽口が叩けるってことは結構余裕なわけね？
だったら・・・これね」
いえ全くそんなことはありません！
ですからスペルカードは勘弁してください！
「ー＝ー日付『ロイヤルフレア』＝ー＝！！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
こちらにまで届いてきたロイヤルフレアを避けながら
俺は逃走する

煙の上がる小悪魔を見ながら
「上手に焼けましたー・・・てか？　まぁ御仕置きだし死にはしな

いだろう」

そして情報収集の為にパチュリーの日記を一冊
小悪魔がオシオキをされている隙に・・・・・ね
少し見逃された感じがないでもないけど

もし見逃されたならそれはレミリアの運命予報ということだろう
本当に頼りきっている・・・妄想かもしれないが

さて、日記を読むとしますか

１２：魔理沙　初見殺し　味覚（後書き）

またもや互いに全力を出さずに終わっております
でもこうした方が納得してもらえると思うんですよね・・・

１３：フランドール　戦闘　お話（前書き）

お話は勿論そっちの方です

一応読む前に解説

しかし公式に基づいてはいるが二次設定であることをお忘れなく

霊力：人間が主に使う力のこと

神が使う場合もあるが使っている神様は特殊な事例

序列は下から二番目

源は己の魂

妖力：主に妖怪などの人外が主に使う力

人間や神で扱う者も居るが特殊な事例

序列は上から二番目

源は恐怖

神力：主に神などの神格化された者が扱う力

普通は神のみが持ち序列は一番上

よってこの力を持つ者は好んで使う

源は信仰

魔力：あらゆる者が使える力

それはもう誰でも持っているが序列的には一番下

源は不明

序列「神力＞妖力＞霊力≧魔力」

力の序列は量により覆る

13：フランドール　戦闘　お話

紅魔館：フラン暴走の日」
この日、紅魔館は様変わりしていた
具体的には場所と時間が暴走の日で締め括れる位に
何故ならフランが能力を全開にして使い始めたから
それはもう悲惨だった・・・・・

「うそつき」

「そう言われる謂れは無いな」
うそつき、そう言ったのは
あの時地下牢に限りなく近い地下室で会話したフランドール
それに相対するは俺、霧先涼

地下室の会話で助けてくれるとでも思っていたのだろうか

・・・毎度のこと思うがとんでもない厨二ネームだ

こうなった経緯は単純
フランが暴れ出して俺がそれを止めに入ったたから
美鈴は早々にフランドールの能力使用で落ちた

俺はというと、フランが能力で『目』を手の中に移動させた瞬間に

「っ！！・・・ぐぅ・・・またか！」

咲夜から借りたナイフを霊力や魔力で強化して投げ
握り潰される前に手首を斬り飛ばしている
流石に能力を使われてしまっては大変なことになる
『目』を移動させられた瞬間には体に違和感が走る
その瞬間にナイフを飛ばして手首を切り飛ばしているのだ
後は多少の読み・・・かな？

「なんで私の能力を知っているの？」
フランドールが切り飛ばされて血が滴る手首を抑えながら問う
表情は驚愕と興味、そして少しの焦り

「教える必要が？」

「ないと思うー＝ー禁忌『クランベリートラップ』＝ー＝」
フランドールは即答し既に再生させた手首でスペルを宣言
その再生力は間違いなく人外であることを語っている

さてここから弾幕、魔方陣が俺達の回りを飛び回り
ある一点に向かっての紫色の弾幕が発射される
そしてさらなる魔方陣が俺たちの横を駆け
そこから自機狙いの青い弾が放たれる
後は魔方陣が行く方向が変わったり
発射される弾が多くなるだけであんまり変わらない
中心方向に行く弾に注意して後はチョン避け、切り返し

そうこうしているうちに時間切れ

「へぇ・・・外来人にしてはよくやるねー＝ー夢符『恋の迷宮』＝ー＝」

フランドールは少し感心した後にスペルカードの宣言

くるくる回りながら弾幕が放たれる

そこに隙間は殆どない

焦りの色はもう消えている

攻撃が能力に対してのみだったからだろうか

それとも弾幕ごっこでスイッチが入ったのだろうか？

この弾幕を避ける方法は二つ

一つ目はスペルカードの攻略

フランドールの周りを回り、わざと開けられた隙間に入る事

この時は弾幕の回転方向に注意

渦巻きの逆に回る必要がある

二つ目は気合避け

フランから離れて狭い弾幕の隙間を縫うこと

この時はわざと開けた隙間以外に放たれる中玉に注意

特に何もなく時間切れ

「？　初見で抜けた？」

「確立二分の一だぞ、普通にありえる話だ」

時計回りか反時計回りか

「ふーん、そういうことにしといてあげる
初見で抜けたのは貴方が二人目だね」
疑いの目を向けられるが
なんとかごまかされてくれたみたいだ

一人目は……博麗の巫女だろう
異変時のあいつの勘は最早未来予知のレベルである

「それよりお前何か大変な事になっているんじゃなかったか？」
「っ！＝ー＝禁忌『ファイブオブアカインド』＝ー＝」
フランドールは急に焦りの色を取り戻しスペルカードの宣言をする

（焦りの色を取り戻すってーのもなんか変だな）

ゲームのこれにあたるスペルは、フランドールが四人に増えて
更にそれぞれが通常弾幕を好き勝手にばら蒔く
だがここはゲームでは無い

「＝ー＝禁忌『レーヴァテイン』＝ー＝」
「＝ー＝禁忌『レーヴァテイン』ー＝ー」
「ー＝ー禁忌『レーヴァテイン』＝ー＝」
「ー＝ー禁忌『レーヴァテイン』ー＝ー」
４人のフランドールがレーヴァテインの宣言し

宣言時に表記した上から順に殺到する
実際にはてんでばらばらだが利便上そうとする
レーヴァテイン４本なのは４体１を活かす為なのか
それとも同じスペカの宣言しか出来ないのかは分からない
が、ゲームとは違うのは明らか

一人目の袈裟斬り
手刀の叩く部分に霊力を集中して叩き、逸らす
二人目の斬り下ろし、半身ずらして躱す
三人目の薙ぎ払い、進みながら霊力と魔力で手を保護し掴む
どんな武器でも掴み手に近い部分はその先端より遅いものだ
しかしとんでもない熱量であるので多量の霊力と魔力で
触れる部分を保護しないと大火傷どころか腕が消し飛ぶ

（ヒヤリとしたね暑いのに、いや丁度良いのか？）

ともかく四人目に三人目を投げつける

「「のわっ！」」
投げつけられた二人のフランドールが動揺している隙に

「そこっ！」
ドウン！という轟音と共に
先程防御に回していた魔力と霊力を一三人目≪本体≫に叩き込むと
周りにいた三人のフランドールが消えた

ここで筒状にねじ込むのがポイント

咄嗟に防御する時にはどこかを中心にして防御を集中する場合が多い
無論中心とされた部分に防御力は集中し
そこから周りに広がるにつれて防御力は薄くなる

そこで中心を外す筒状に攻撃力を叩き込むとどうなるか
答えは『一番防御の集中した部分を避けて攻撃が入る』である

「かはっ！・・・・・・＝＝＝＝ＱＥＤ『５００年の波紋』＝＝＝＝！」
ダメージから即座に復帰したフランドールが更にスペルカードが宣言され
フランドールの両手両足から魔方陣が放たれる
そしてその魔法陣を頂点として長方体の結界が生成される

（これの元となるスペルは波紋の様に反射して襲いかかる弾幕
障害物も無くなってしまったここでどうするのかと思ったらそういうことか
結構集中した一撃を小細工まで仕掛けて叩き込んだというのに
『かはっ！』で済んでいるのは流石吸血鬼）

元となる［ＱＥＤ『４９５年の波紋』］でもかなりの鬼畜弾幕
純粋に濃過ぎるので避け切るのが非常に困難なのだ
このスペルカードの弾幕は更に濃い事が予想される

「早々にボムって弾幕発車前に押し切る！
ーーーー魔霊符『力の濁流』ーーーー！」
唱えたスペルは、以前魔理沙に放ったものと根本的には変わらない
違いがあるとすればそこに霊力が混ざって濁っていること
しかしその量は段違い

「この量は・・・蝙蝠になって回避は無理！
結界を解けば押し流される、防御しかない！」
そこに弾幕を放つ暇はない

フランドールは自身を妖力と魔力で防御した直後
その流れは到達する
魔力と霊力の暴力はフランドールの張った結界を埋め尽くし
暴力威力に耐えるように結界が軋む

しかし限界は訪れる
結界には次第に亀裂が走って行き
暴力が集中していた一点が破れる

≪ドパァァァン！≫
形容するならそんな音だろうか

破れた結界から水みたいな魔力と霊力が流れ出る
そこからフランドールも吐き出され
紅魔館に辛うじて残っていた外壁に直撃、その外壁が崩れる

がらり
崩れた外壁を押しのけて現れたのは
「もう、駄目だ魔力も妖力も私の中にはあまり残っていない
私は封印されて終わり・・・ねぇそうでしょ？　外来人の人」
何もかもを諦めて絶望した表情を浮かべたフランドールだった
だから俺は答える
「何勘違いしてんだ」と
正直こっちは魔力も霊力もほぼ0なのだ
これ以上はもう勘弁して欲しい

１４：戦闘　和解　ファイブカード

［紅魔館：決着の日］
フランドールとの戦いは終わりを迎えようとしている
その前にフランドールには本当のことを知ってもらうことにした

「何を勘違いしている？」

「どういうこと？」

俺の一言の意味を測りかねたのか
フランドールが疑問に首を傾ける

「あの大図書館にあった魔術式は確かに封印の術式だった
だが力を封印するにしてもお前をどうやって
あそこまで連れていくのであろうな？」

「力ずくで引っ張っていく」

紅魔館の戦力があればできなくはないな

「お前は殺されるのではないかと言っていた
もしそうなら力ずくで連れていく場合は封印じゃなくて
いっそのことそのまま殺す術式にすれば良いのではないか？」

闘いで力を消耗していれば一発だ

「確かにそうだね、でも封印すれば確実に殺せるのは確かだよ？」

「それにしてもあの魔方陣は妙だ
あれだけ大掛かりなのに封印するのは能力だけ
それもお前の能力には壊されるとパチュリーは四苦八苦していたようだぞ」

「・・・・本当に？」
フランドールは疑いの目をこちらに向ける

当然だろう、さっきまで裏切られたと思っていた相手に
こんなことを聞かされては

「本当だ、俺がこれを持って行っても
気づかない程度には四苦八苦していたみたいだ」

だから論より証拠

ドスン、とパチュリーの日記が姿を現す

あー重かった、厚すぎるだろこの日記帳

それに対しレミリアが
「成程、最近パチュリーが『私の日記がどこかへいった』とか言っていたけど
あんたの仕業だった・・・と」
などと紅茶でも飲みながら言っていた

俺の勘が正しければあんたが仕掛けたんだと思うけど？

「え・・・っ！　これはパチュリーの日記！」

「そうだ、白黒の魔法使いみたく勝手に借りておいた
今回のことが終わったら返すから心配ご無用」

死ぬまで借りていく・・・だったら永久に戻らないからな俺は

「で？」

ん？

「で？　だから何？
パチュリーが私の能力で四苦八苦しているのは分かった・・・だから？
次善策かもしれないでしょ？」

つまり殺せなかった時の保険・・・と？　そう思っているんだなフランは

もう面倒臭い

「ほら読め！　もう面倒臭い！」

ほいっと
パチュリーが見たら怒りそうな光景・・・つまり日記を放り投げて渡した

「おっとと！」
それをフランドールは慌てて受け止める
重いのは知っているだろうに
そしてフランドールはバランスを崩す
いくら力があっても所詮子どもの体重だ
そしてその日記は地面に落とすまいと持ち上げられていた
フランドールは倒れていたが

（・・・へぇ）
今ので分かったことが一つ

「・・・・・・・・・・・・・」
フランドールはしばらく日記を凝視した後

ぺらり、とページをめくった
その次はパラパラと後ろから白紙ではないページを探している

うん、それは良い判断だ
パチュリーの日記帳は分厚い
最近のことならうしろから探したほうが速い

「２０１１年・月・日
『客人が父さんの遺した本を見つけていた
なくしていたと思っていたのに』
これは違う
２０１０年・・月・・日
これはさっきこの人が言ってたこと
私が知りたいのは魔方陣の目的・・・・」

能力に対して四苦八苦の事だろう

やはり・・・か
俺の時間稼ぎだということは分かっているはずなのに
それでも日記を読んでいる

「１９・・年・・月・日
『「フランドールを殺す案が出たことがある
そんな噂が流れていた・・・まったく４９５年以上も前の事を」
なんてレミィは言っていたけどフランを閉じ込めた時のことは話してくれない
何を隠しているのだろうか』・・・・・・」

何かいざこざがあったのか？

そして暫くした後
またパラパラとページをめくり始める・・・え？

そして一度日記を閉じた後、今度ははじめの方からパラパラとめくり始める
どういうことだ？

パラパラとめくる・・・・それがいくらか続いた後
「１５・・年・月・・日
『レミリア・・・いいえ、今はレミィと呼べる仲になった
レミィは私が魔法使いだと知ると依頼してきた
「フランを外に出したい、だけどその為にはあの子の能力は騒動すぎる
だからその能力だけを封印する魔法を作って欲しい」そんな依頼だ
これは大仕事になりそうだ、腕が鳴る

だけど「父と母には知られないように」とはどういうことだろうか・・・そういえばレミィはフランドールを地下室に入れた日夜まで泣いていたような気がする
盗み聞きまでして申し訳ないけど「こうするしかなかった」とか？どういうことだろうか・・・なんだか調べるのは危ない気がする『・・・」

（何故・・・いや成程、一つ確定か）
これは後でレミリアを締めよう

フランドールが沈黙している

「わかっただろう？　お前の心配は取り越し苦労だったということが」
「・・・・・なんで」
「？」

「なんで・・・・・

ーーーーーーーなんで今まで誰も教えてくれなかったの？ーーーーーーー

それはフランドールの切実な思いだった

「なぁフランドール」

「フランでいいよ、貴方はきっかけになってくれたんだから」

「そうか・・・だけどな、お前に言っておくよ」

これだけは伝えておきたい

「なに？」

「フランドール、お前は一度でもレミリアに聞いたことがあるか？『何で私を閉じ込めたの？』てさ、一度でもあったか？」

「・・・・・・・そういえば、なかったかも」

やっぱり

「だろうね、理由は『言い辛かった』違うか？」

「そうだ、ね・・・うん、理由を聞くのが怖かった
もし私のことが嫌いだから、そんな理由だったらどうしようって」

「だろうなぁ・・・・・・この似たもの姉妹が」

本当に、そう思う

「「え？」」

スカーレット姉妹が同時に声を上げる

そしてここからは確証のない推測、外したら格好悪い

「ここからは俺の勝手な推測だが、結局あんたたちは似たもの姉妹
フランはレミリアに聞くのが怖かった、レミリアは今更話し合うの
が怖かった
・・・・・違うか？」
恐らく図星だったのだろう、姉妹は俯き、沈黙している

ならここからも当たっているはず

「結局４９５年以上も前から問題を抱えたまま
レミリアはそこから引きずり続けてそこから時が止まった
フランはレミリアと同じ位になれれば解るかもしれないとそこまで
頑張って
しかし解らずに、でもこれ以上行ってもわからない気がして・・・
時が止まった
咲夜が止めたわけでもないのにな」

少し、冗談を交えて

「・・・・・そんなわけ」
「外れてるのか？」
外れてたら本当にどうしようか
そう思うが表では堂々とする
「いいえ・・・当たってるわ」
それを答えたのはフランドールではなくレミリアだった
「そう、なんだ・・・・・うん、決めた
ーーーーあんたをさっさとぶっ倒して、お姉様に問い詰めてやるんだからーーーー

何かが吹っ切れたフランのセリフ
よし、最後の詰めか

「だが、そう簡単にいかせてやると思うなよ？
なんせ時間稼ぎは終わっているのだからな」
そう言いながら周囲からかき集めた魔力を高める

結界の中で放ったスペルは魔力と霊力の形を変えてそのまま放出するスペルだ
すなわち魔力と霊力そのもの、後でかき集めることも出来る
今までの会話はその為の時間稼ぎでもある

するとフランドールはニヤリと笑った

「さて、一つ問題です
私がレーヴァテインの前に唱えたスペルは何だったでしょうか」

「確か、禁忌『―ファイブ≪・・・・・≫オブアカインド』・・・・・・！？」

ー＝ー禁忌『レーバテイン』＝ー＝

後ろを振り向き、その時にはもう遅かった
後ろにいた―5人目≪・・・≫のフランドールのレーヴァテインの一撃を受け
気絶してしまったのだ

「ジョーカー≪切り札≫は最後まで隠し持っておくものだよ？
なんでね」

ファイブオブアカインド、通称ファイブカード
ポーカーゲームにおいて
ハート・スペード・ダイヤ・クローバー・・・・・そしてジョーカー
以上４枚で同じ数字のカードを揃えた時に出来る役だ

さて、脇役はここで退場といきますか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5752y/

東方妄想記

2012年1月13日00時04分発行